県政特集

オリンピック憲章に定められた文化の祭典
「地域とアートが共鳴する」静岡県文化プログラム

本県は、東京2020オリンピック・パラリンピックの開催を〝文化の創造と発信、相互理解の深化〟を図る好機と捉え、「静岡県文化プログラム」を展開している。大会後のレガシーを見据えたその取り組みは、全国から注目を集めている。

スポーツと文化の両輪で平和の祭典を

オリンピック憲章は、開催都市が文化プログラムを行うことを定めている。東京2020オリンピック・パラリンピック（以下「東京2020大会」）においては、川勝知事が2014年の全国知事会議で、日本全国での文化プログラム展開を呼びかけ、その方針が採択された。以来本県は、「地域とアートが共鳴する」をテーマに2016年からプログラムを実施し、年々充実を図っている。

本県の文化プログラムで総合プロデューサーを務める静岡県舞台芸術センター（SPAC）の宮城聰芸術総監督は「スポーツの面白さは、同じルール、一つの物差しで競い合うこと。一方、芸術文化の面白さは、感性の物差しが増えていくこと。このような異なる尺度を知ることで、オリンピック・パラリンピックが本来の平和の祭典としての価値を持つのでは」とオリンピック・パラリンピックにおける文化の役割を語る。

親子で楽しむ音楽会

舞踏家によるパフォーマンス

▲ 沼津市の商業施設の空きスペースを生かして参加型コンサートなど多彩なプログラムを開催。

本県の文化プログラムは、県内各地のさまざまな担い手により、美術、演劇、伝統芸能、音楽、舞踊、映像、文芸、食など、多岐にわたるジャンルで切れ目なく展開されており、大会開催後も続く。

注目すべきはジャンルの多彩さだけはでない。福祉、教育、子育て、産業、まちづくりなど、社会のさまざまな分野と芸術文化を結び付けた取り組みを促進している。専門知識を持つプログラム・コーディネーターが実施団体に助言することで、目的や達成プロセスが明確になり、地域の人々との連携などを通じて、全国的にも先進事例となるユニークなプログラムが生まれている。

アスリートの檜舞台であり、平和の祭典である東京2020大会が「文化の祭典」としても盛り上がれば、文化プログラムのような、芸術文化を通じたさまざまな取り組みが地域に定着する。そのことが多様な物差しを認め合える、寛容で感性豊かな地域社会の形成につながるのではないか。

そうなれば文化プログラムは、東京2020大会の大きなレガシーとして、本県に刻まれていくに違いない。

2020 SHIZUOKA 静岡県文化プログラム

[文化プログラム2020]年間スケジュール

4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月

東京2020オリンピック（7/24～8/9）
東京2020パラリンピック（8/25～9/6）

★東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラム
ふじのくに野外芸術フェスタ2020静岡
SPACアンティゴネ（駿府城公園）
（5/2～5）

★ふじのくに伝統芸能フェスティバル
（富士宮市民文化会館）（5/31）

関連企画「先端技術展」★
（静岡文化芸術大学）（6/26～7/12）

★ふじのくに各流大茶会
（茶の都ミュージアム）（7/29～8/2）

★詩と舞踊と音楽の祭典
（グランシップ）（7/26）

★SPAC「忠臣蔵2020」
（グランシップ）（8/16）

★工芸展「手の愉悦-革新する工芸」
（静岡文化芸術大学）（7/17～8/2）

★かけがわ茶エンナーレ
（掛川市）（10/17～11/15）

★富士の山ビエンナーレ
（富士市ほか）（10/24～11/23）

★静岡国際オペラコンクール
（アクトシティ浜松）（10/31～11/8）

地域伝統芸能全国大会★
（静岡市民文化会館ほか）（11/28～29）